

龍谷大学史報

vol. 16



目 次

留学生と共に17年	田尻 英三	2
龍谷大学の思い出ー学生時代と教員時代ー	舟橋 和夫	4
『学林諸記』天保八年（一八三七）四月～同年六月	I～VI	
表紙解説・資料室だより		12

留学生と共に17年



龍谷大学名誉教授 田尻 英三

私は経済学部に所属し、深草学舎の学部留学生や留学生別科の「日本語」の授業を通して多くの留学生と過ごした17年を誇らしく、また楽しく思い出している。この原稿では、この間の留学生との交流を中心に書くことにする。

学部の留学生とは「日本語」の授業だけではなく、親の来日や部屋の賃貸の際の保証人になったり、入国管理事務所へ行ったりして常につきあってきた。家族で留学している大学院の留学生の子どもが小学校へ入学するときは、私の妻と一緒に学校へ行き、入学の手続きを手伝った。また、留学生本人やその子どもが交通事故に遭ったときなどには、病院での検査や加害者との交渉にもつきあった。それぞれのときは大変だったが、私は留学生との関わり方が一層深まったと感じていて、今では楽しい思い出になっている。

私が龍谷大学に赴任したときには、留学生交流会というものはなかった。以前、一度教職員が呼びかけて交流会を作ったが、その会はあまり続かずそのままになったと聞いている。私が赴任してからは、授業中に繰り返し留学生交流会の必要性は言ってきたが、その運営はあくまでも留学生が自主的に行うべきものだと考えていたので、留学生のほうから言いたくないかぎり留学生交流会は立ち上げないと決めていた。2002年になって留学生交流会を作りたいという留学生が出てきたので数人だけで立ち上げたが、言いたした留学生自身があまり積極的な活動をしなかった。それを見かねた数人の留学生が、改めて留学生交流会を作りたいと言ってくれた。2003年から、新しいメンバーによる現在のような留学生交流会の活動が始まった。

4月には、新入生歓迎会を開いていたが、資金も少ないので毎回妻が2升のちらし寿司を作って差し入れしてくれた。秋の龍谷祭には、サークルとして最初の頃は餃子を出していたが、その器具置き場として研究室を貸したので、研究室がにんにく臭くなり困ったことがあった。その後は小籠包を出すようになったので、ほっとしている。この小籠包は、龍谷祭でもトップの売り上げを誇っている。12月には、外国にはない忘年会というイベントを行い、現在は200人以上の学部・大学院留学生のほか、交換留学生や留学生別科の留学生が参加している。この忘年会は、一部学外の食堂に料理を頼んでいるが、ほとんどは留学生が料理をし、歌や踊りなども自分で準備し、当日の運営もすべて留学生が担当するという手作りの会である。このように、無償の活動を続けている留学生を、私は誇りに思っている。以前、KBS京都テレビに「金5時（きんごじ）」という番組があり、毎年この留学生忘年会を取材して放送してくれた。この忘年会には、大学や親和会からの援助の他に、教職員の方々からもカンパをいただいて、何とか景品を出せるようになっている。カンパをいただいた教職員の方々のお名前は忘年会で披露しているが、このような方々のご支援にも篤く感謝している。

2007年10月6・7日には、龍谷大学で日本語教育学会秋季大会を開くことになった。これは、神戸大学が2007年2月になって学内の新規工事で学会が開けなくなったことがわかったためであ

る。500名以上が集まる全国大会を半年間だけで準備しなければならなくなり、この時期では龍谷大学の全国大会のための助成も申請できない状況であった。また、日本語の専任教員の一人は体調を崩していたため、経営学部の特任教員や当時の国際文化学部の教員の手伝いはあったが、実質的には一人で運営しなくてはならなくなった。このときも、留学生は積極的に手伝ってくれ、学会当日は関西外語大学・立命館大学・神戸の日本語学校コミュニカ学院の教員・別科の非常勤講師と共に、留学生は受付・会場設営・地下鉄やJRの駅での道案内にと大活躍してくれた。学会終了後、私が企画した打ち上げでのお酒の旨さは、今でも忘れられない。

学内でもあまり認知されていない留学生別科についても、ふれておく。1985年度から2014年度までは、留学生別科として進学・就職希望の留学生と交換留学生の両方を受け入れ、日本語能力別のクラス運営をしていた。交換留学生で日本語能力の高い留学生は、学部の授業も受講できるようなシステムであった。この留学生別科から毎年各学部や大学院へ進学し、卒業後も龍谷大学の職員になった者もいる。交換留学生も各大学・大学院を卒業後、関西の大学院へ入学したり、会社に入ったりした者もかなりいて、今でも連絡を取り合っている。彼らは、龍谷大学での留学生生活が良い思い出になっているようである。これらの別科生・交換留学生を年2回ほど私の自宅に招待し、浴衣を着せたり、おでんを食べさせたりした。これは、妻の協力なしにはできないことであった。この留学生別科は、2015年度（私の定年退職後）から、進学に特化した留学生別科と交換留学生を対象にしたJEP KYOTOに編成し直されて、現在に至っている。

大学院経済学研究科では、2014年度から独立行政法人国際協力機構のいわゆるABEイニシアティブのプログラムを受け入れ、私も2014年9月から半年間、アフリカのエチオピアの留学生2名とタンザニアの留学生1名と以前から在籍しているカポベルテの留学生1名の日本語を担当した。アフリカの留学生を担当するのは初めてなので、まずは、日本の生活になれることを第一の目標とした。毎時間の目玉として、授業の最初に日本の果物やおでんなどの食べ物を持っていき、味わってもらったあとで自分の国に似たものがあるかなどを話してもらった。途中から、彼らは私からのお土産が楽しみになり、授業に来るなり私のカバンをのぞき込むようになった。ただ、タンザニアからの留学生はイスラム教徒で、エチオピアからの留学生はエチオピア正教徒なので、食べ物の選択にも気を使った。2015年の3月、夜桜見物に連れて行った時、エチオピアの留学生ベンティさんが生まれたばかりの自分の赤ん坊の写真を見せてくれた。その子のアムハラ語の名前は、日本語では「成功」という意味の名前であった。ベンティさんによると、今回の留学生生活は自分にとって成功であったから、このような名前を付けたという。ベンティさんの子どもが大きくなるにつれ、龍谷大学での思い出が話され続けるようになれば、私にとっても嬉しいことである。

経済学部では学部独自に2003年から留学生新入生の歓迎会を開いていて（有志では1998年から始まっている）、他学部の留学生を羨ましがらせている（この件では、経済学部教務課梅岡和朗課長のご協力に感謝）。このときは、経済学部教務課の職員が大活躍してくれる。それに応えるために、歓迎会終了後に教務課の職員と近くの中華料理屋へ行き、メニューにない辛い中華料理を食べるのも、私の楽しみの一つになっていた。

最後に、私からの龍谷大学への希望を述べる。今後、龍谷大学は留学生の現在よりの増加を計画しているが、そのためには各学部・大学院の教職員の留学生への一層のご理解が必要である。将来にわたっての留学生へのご支援をお願いしたい。

龍谷大学の思い出

— 学生時代と教員時代 —



龍谷大学名誉教授 ふなはし かずお
舟橋 和夫

私の龍谷大学の思い出は、大きく二つの時期に分けられる。ひとつは知らないままの初期値形成時期に当たる文学部の学部生・院生・副手・特任講師の時代であり、2回目の思い出は、他大学の教員を経験してからの社会学部専任教員としての思い出である。時代背景も捉え方も大きく異なる2つの時期を気軽に眺めてみたい。

1) 学生時代

文学部に入学したのは1967（昭和42）年である。当時一般教養科目の授業は深草学舎で、専門科目の授業は大宮学舎で開講されていた。深草学舎内では鉄筋コンクリートの校舎、旧兵舎をそのまま利用した校舎、プレハブ風の校舎などが雑然と配置され、校舎らしい校舎といえれば13号館（現和顔館の建設地）ぐらいであった。一般教養科目では語学を除けば受講生の多い授業も多く、大教室での受講も普通の光景であった。更にキャンパス内では、いつ授業が始まり、いつ授業が終わったのか分からないほど常時人の往来があり、まるで街中にいるような雰囲気を醸し出していた。そのためか、自然と勉学よりも部活動に熱心に励むようになった。その上L字型に建つ現在の紫英館の折れ曲がる辺りにあった部室も、工事現場のようなプレハブの建物であったと記憶している。人が廊下を歩くと地震のように揺れていたのが印象に残っている。

それが3回生になって大宮学舎に通学するようになると、雰囲気が激変した。学舎は正面に事務室としての本館、両側を挟むように配置してある教室の北翼と南翼など落ち着いた建物で構成されていた。相当古く窓の開閉も相当困難な所もあったが、歴史的重みを感じさせて落ち着きを保っていた。このあまりにも異なる両キャンパスの雰囲気に驚いたが、キャンパス内に佇むと自然と心が落ち着くのを何度も経験した。多少汚れたガラス越しに外を眺めていると、家にいるような不思議な感覚におちいり不思議と安らぎを覚えた。学部4回生の時に休学をして海外に出たが、1年半後に帰国したら真っ先に大宮学舎に行って、誰もいない教室でポケットしていることもたびたびあった。

大宮学舎の持つ「落ち着いた」雰囲気は勉学にとって何事にも代え難い。研究でも教育でも以下のような説明を学生諸君にすることがある。何事もよく調べ上げて、調べた事実をよく吟味し考え計画を立て、人を組織化して実行する必要がある。しかし、それだけでは重要なものが抜けている。それはそれら総てに通底するあるセンスであると。しかし、そのセンスを磨く機会は人生でそれほど多くない。人を自然と引きつけ、落ち着いた雰囲気を醸す大宮学舎のセンスの良さはきわめて貴重な存在である。いつまでも人のセンスを磨き育てるキャンパスでありつづけて欲しいと願っている。

大宮学舎には、3回生の時から12年間お世話になったが、センス育成の場として最高の場であった。七条通りから門を抜けると気持ちが引き締まり、正門に入る時に一礼をするとビシッと更に身が引き締まる。続いて砂利庭を歩くと、砂と砂が擦れて愉快的な音楽が奏でられる。まさに、センスを磨く聖地としての要素にあふれている。

2) 教員時代

その後、瀬田の地に新設され、ほぼ軌道に乗っていた社会学部に16年ぶりに帰ることになった。1998（平成10）年のことである。

しばらくして社会学部内に新学科を増設しようとする動きが出てきた。それは以下のような背景が関係していた。ひとつには社会学部の事情があった。当時の社会学部では学生数に対する教員数が相対的に多く、当局よりその解消を求められていた。教員数の減少が現実的に困難である以上、学生数を増やすことしか解決できそうになかった。そのための方策の一つとして新学科の創設が考えられ、学部での議論に随分と時間を要したが、新学科の増設が学部で承認された。

一方、大学全体の問題として話題にのぼっていたことがあった。とりわけ大学のレジャーランド化というキャッチコピーで大学教育の疲弊が問題視されていた。学生の多くは知的好奇心を持たず、講義にあまり興味を示さず、勉学に熱心ではないと問題視された。

他方、教員は研究には熱心であるが、教室での講義には関心が向かず、実学とも縁遠いなどという批判が耳に届いていた。新学科の新設を機にそれらを一新したいという願いもあった。学生と教員が共に実践・研究して、キャンパスの内（座学）と外（現場）を一体的に運営し、現場の課題を発見・解決するという課題解決型教育によって、教育と研究の統合をも目指そうとする機運が学部に見られた。

社会学部は以前から現場主義を全面的に謳っていたが、キャンパス外の社会の現場ではいわゆる社会問題が山積していた。たとえば、人びとが地域に関心を向けないため、一人住まいの老人が亡くなくても周囲の誰も知らない。そのため地域のつながりが問題視され、地域社会の崩壊とその再生が重大な社会問題として認識されるようになっていた。

このような背景に背中を押されて、新学科を構想することになったのである。新学科の開設を通して社会学部や日本社会の課題解決の一助になればという気持ちもより強くなった。学部内では改組委員会が組織された。そこで学部改革（新学科構想）案が練られ、学部の承認を得つつ学長会で何回も説明し続けた。しかし、大学当局の反応は実に冷ややかなものであった。なかなか首を縦には振らなかった。当時の文科省に説明に行くと、担当係の人の反応はかなり肯定的であるが、大学当局からはいろいろと不十分な箇所を指摘され続けた。

それでも、学長会に何度も何度も説明に出向いた。いつかは正確には覚えていないが、ある時ある人が一言言った。「もうこれでいいんじゃないの」と。これがきっかけで全員が賛成しだした。学科創設の概要が決まった瞬間である。その時の学科名称が「コミュニティマネジメント学科」である。

それから、申請手続きの慌ただしい日々を送ることとなった。新学科の設置科目、教員構成などやるべきことは山ほどあった。以前からかなり遅い帰宅であったが、この後の研究室からの退出時間は深夜をすぎるときが多くなった。暗闇の中のところどころに小さな明かりが見える廊下や階段、まったく人気がない駐車場など、思い出すだけでよく倒れずにやってこられたと思う。当然夕食はほぼ外食になって、その分お腹の周りが大きく成長したのはいうまでもない。その後遺症のために、体重の減量に現在も苦労を重ねている。お陰で2004（平成16）年4月には新学科が開設できた。

新学科の特徴は実習を全面に出したことである。学生には講義の座学だけでなく、現場で行動を起こし考察することを課した。キャンパスのオンとオフの両方で学修することの大切さを学んで欲しいと考えた。そして、キャンパスで学んだことを現場で試し、現場で疑問に思ったことをキャンパスでは理論的に考察することを目指す、といったことを学生自らが自主的に実践するように求めた。

このような実習を重視した教育方法も、現在ではかなり多くの大学で見られるようになった。龍谷大学が試行錯誤的にトライした試みが多少とも認められているようで、自分自身でも地域を相手に現場主義を貫き通そうと決意している次第である。

留役所『学林諸記』二 天保八年四月〜同年六月

【頭注】

【翻刻】

曇龍 『史報』十二 四月九日

号頭注参照。

行照 『史報』十二

号頭注参照。

令玄 『史報』十一

号頭注参照。

廓超 『史報』十一

号本文参照。

勸学 『史報』二号

補注⑤参照。

知事 『史報』十二

号頭注参照。

隆恵 III頁上段参

照。

承襲 『史報』十二

号頭注参照。

雪峯 III頁下段参

照。

対面所 門主が門末

の者と公的に対面す

る場所を言う。鴻之

間を指す。

少進 『史報』十二

号頭注参照。

格別之凶作 『史

報』十五号補注②参

照。

筑前 曇龍

ミノ 行照

越中 令玄

播州 廓超

勸学 曇龍

知事 隆恵

廓超 雪峯

承襲 雪峯

四月廿二日

右御対面所於狭屋、少進謁、左之通り口達申達

迄不通時節柄、追々上京之所化中一統手元窮難涉

可致与、於上儀氣之毒に思召候。依之乍聊為御救、当

時在京之者ハ不及申、此上追々上京之所化共人別ニ青

銅五百銅ツ、被下之候間、其段一統江相達可申。尚亦

掛席之義者七月十五日限と申義、御定法之処、右様之

年柄、且未夕御触達ハ無之候へ共、当年関東御代替り

ニ付、御先例通御末寺一同血誓被仰付候ニ付、近々御

触達ニ相成候得者、追々上京も可有之。依而格別之次第

を以、当年限十一月中上京之面々ハ掛席御免被仰出候

間、此段も一同江相達可申旨申渡ス。

但曇龍ハ麝香之間サヤニおゐて、右同様着座ニ而少進

同様申渡。右思召之程行届候様、所化共へ申請候様

御定法↓補注①

関東御代替り 十一

代將軍徳川家齊から

十二代將軍徳川家慶

への代替わり。

御先例↓補注②

麝香之間 『史報』

五号頭注参照。

見王 『史報』一号

補注①参照。

虎之間 太鼓之間と

波之間の北に位置す

る部屋。

愚禿抄 親鸞著、

『二卷鈔』とも。

玄義分 観經玄義分

のこと。『史報』四

号頭注参照。

左源太 『史報』十

二号頭注参照。

浄土文類聚鈔 文類

聚抄。『史報』十二

号頭注参照。

成美 『史報』十二

号頭注参照。

申渡。

五月十日

一

学林 知事

一見王儀当十九日・廿日両日之内、御免被仰付被下置候ハ、難有奉存候。以上。右虎之間方差出ス。

五月十三日

一見王廿日与被仰出候ニ付、虎之間江申達。

一学林臨時御成、十五日与被仰出。御用掛り江申達。

六月三日

一来戌年夏

本講愚禿抄

副講玄義分

右之通り被仰出。御用懸り左源太江相達。

六月七日

一浄土文類聚鈔聴記

副講

右例年之通り御用掛り方差出ス。

六月十日

一当夏

承襲

国元老僧大病ニ付、急々帰国致し度旨願出。尤満講ニ

も相成り、最早御用者無御座候故、願之通り帰国被仰

付候方可然哉之旨、御用懸り方申出ル。

六月十七日

選挙 『史報』十二号補注①参照。

一 学林選挙願ニ付、学試之義伺、別紙之通り十八通、御用懸り左源太方差出ス。尚同人申居候者、別紙十八通相伺候得共、余程多人数ニ相成り、中ニ者学林役掛り之者も有之、右学試論達之節、取扱方六ヶ敷義も御座候間、右之内端書之者丈ヶ江学試被仰出候、其余者願書御預りニ相成候様仕度、此段内々奉伺候旨。名前左之通り。

助教 『史報』一〇号補注③参照。

助教願 越中 格龍

得業 『史報』一〇号補注③参照。

得業願 同 徳垂

徳垂 III頁下段参照。

同 筑前 玄雄

玄雄 III頁下段参照。

同 大坂 公龍

照。後に専念寺に転住。嘉永五年勸学。

同 肥前 全象

全象 III頁上段参照。

右之通り試被仰出候而可然哉、奉伺候。

聖浄二門 仏教を聖道門と浄土門の二種類に分類することを言う。

一願書 勢州繩生村 真光寺得業 梵龍義

正信偈 正信念仏偈。親鸞著『教行信証』「行」巻末にある、「六十行百二十句」の偈。

從來聖浄二門ニ渡り修学出勢仕申候処、就中正学ニ而者正信偈、兼学ニ而者起信論義記、御試問被成下度御願申上候。以上。

起信論 大乘起信論。伝馬鳴作、真諦訳の一巻本と実叉難陀訳の二巻本の二種の漢訳。

天保八四年 六月 土州上座 普治 江州藤満 普照 甲州藤満 成美

御役所 学林

越前坂井郡下番村 興源寺住 玄存

一願書

右之僧從來如法ニ修学出精、無懈怠御宗意之疏抄、其内二門偈を研究仕り、兼而者法相を学居申候間、御試問被成下度奉願上候。此段御許容被成下候ハ、難有奉

上座 『史報』十四号頭注参照。

普治 不詳。

藤満 『史報』十四号頭注参照。

普照 『史報』十四号頭注参照。

二門偈 親鸞著『入出二門偈頌』、二卷。

實應 不詳。

深英 不詳。

親念法門 善導著。七部聖教の一。

耆年 『史報』十三号頭注参照。

薩行 不詳。

存候。以上。

年月日

越前 實應

加賀 深英

御役所

一願書

越中新川郡泉村 正覚寺新 博仁

右之僧從來修学出精仕候所、御宗教之内、別而親念法門研究仕罷有候間、御試問被成下度奉願上候。此段御許容被成下候ハ、難有仕合ニ奉存候。以上。

年月日

尾張 薩行

越中 上座 鷲山

同 藤満 徳垂

御役所

学林

豊前宇佐郡元重村 宗林寺新 南鳳

一願書

從來学業出精、正三者御宗意之疏抄、其内別而四帖之御疏研覈仕、兼而者天台摩訶止観会説等仕居申候間、御試問被成下度奉願上候。此段御許容被成被下候ハ、難有奉存候。以上。

年月日

学林

御役所

越中国新川郡柿沢村 円光寺新 鷲山

一願書

右之僧從來修学出精仕候所、御宗意御聖教之内、別而

御役所

学林

御役所

同

越中国新川郡柿沢村 円光寺新 鷲山

一願書

右之僧從來修学出精仕候所、御宗意御聖教之内、別而

入出二門偈研究仕罷在候間、御試問被成下度奉願上候旨。

年号——夏

耆年尾張 薩行

上座越中 □命

藤満江州 普照

学林

御役所

選択集 『史報』三
号頭注参照。

一同

肥前須古新町正行寺

十四夏 全象

前文同断。正二者御宗意之御聖教、其内玄義分帰三宝

偈研覈仕、兼而者儒書經学詩文等相学申居候間、御試

問被成下度奉願上候旨。

江州 不染

年号——

耆年 不染

肥前

上座 智旭

筑前

藤満 玄雄

学林

御役所

一同

近江国甲賀郡柑子袋村

光林寺住 隆恵

前文同断。御宗意御聖教之内、別而浄土論研究仕罷有

候間、御試問被成下度奉願上候旨。

江州執事 柔順

年号——

耆年 柔順

肥前

上座 全象

江州

上座 教随

教随 不詳。

柔順 不詳。

学林

往生論註 『史報』

御役所

一同

筑前国宗像郡下西郷村

正蓮寺 玄雄藤満義

講釈・会読等も段々相勤、御宗部者通而研究仕居申

候。最其内二者選択集、及兼学二者法華玄義練磨仕

居申候間、御試問被仰付被為下候ハ、本人者不及

申、拙僧共至迄如何計敷難有仕合奉存候。此段偏二

奉願上候旨。

同国 現燈

天保八丁酉五月

同 珠山

同 宝雲

学林

御役所

一同

豊後大野郡宮尾村

了因寺住 雪峰

前文同断。御宗部者通而研究仕居申候。其内正信偈和

讃講釈会読等仕居候間、右両部之内二而御試問被成下

度奉願候旨。

豊前

年号——

上座 善讓

日向

同 黙了

豊後

同 徹道

学林

御役所

学林

一同

越中国新川郡飯坂村

誓光寺住 徳垂

前文同断。御宗意御聖教之内、別而往生論註研究仕罷

有候間、御試問被成下度奉願上候旨。

年号——

尾州

耆年 薩行

越中

上座 博仁

近江

藤満 普照

学林

御役所

一同

越中国砺波郡城端村
瑞泉寺住

得業 格龍

前文同断。既ニ得業被仰付罷有候所、追々進学仕、聖
浄二門ニ通し、別而正学者大無量寿経、兼学者十不二門
指要抄研究仕罷有候間、御試問被成下度奉願上候旨。

年号——

尾張

耆年 薩行

越中

上座 僧環

同

藤満 快穩

学林

御役所

一同

美濃国厚見郡本庄村
快樂寺 大信

前文同断。御宗意御聖教之内、別而觀経玄義分研究仕
罷有候間、御試問被成下度奉願上候旨。

耆年 尾張

薩行

上座 越中

藤満 美濃

了慶

学林

御役所

一同

摂州島上郡唐崎村
信楽寺新 岱観

前文同断。御宗意者経論釈通而研究仕居申候。就中往
生論註并選釈集講釈・会説等仕居候。右両部之内ニ而
御考試被成下度奉願上候旨。

年号——

耆年

摂州

上座 同

得業 同

了教

秀應

崇仁

学林

御役所

一同

豊前下毛郡瀬瀬村
照雲寺住 善讓

前文同断。御宗意者通而研究仕居申候。就中浄土論并
選釈集講釈・会説等仕居候間、両部之内ニ而御試問被
成下度奉願上候旨。

年号——

豊前

耆年

日向

上座 黙了

豊後

藤満 雪峰

学林

御役所

一同

芸州山県郡本地村

浄楽寺住藤満 月瀛

前文同断。御宗部者通而研究仕居申候。其内選択集及浄土文類聚鈔、右両部之内ニ而御試考被仰付被成下度奉願上度候旨。

年号——

同国 十夏 崇廓*

同 十夏 訶提*

同 廿四夏 至傳*

学林

御役所

一同

撰州大坂正覚寺 公龍

前文同断。御宗部并天台部通而研究仕申候。最其中御宗部ニ而者浄土文類聚鈔、天台部ニ而者玄義分文句練磨之由ニ御座候。右之内ニ而御試考被成下度奉願候旨。

年号——

同国 賢珠*

同 秀應*

江州 公萼*

学林

御役所

一同

美濃国本巢郡別符村

光泉寺住 了慶

前文同断。御宗意御聖教之内、別而正信偈研究仕罷有候間、御試問被成下度奉願上候旨。

年号——

濃州執事

耆年 龍溪*

同 上座 大信

同 同 慈門*

学林

御役所

慈門 不詳。

龍溪 不詳。

一同

越中国負婦郡寺家村 報恩寺新 蔵遠

前文同断。御宗意御聖教之内、別而觀經散善義研究仕罷有候間、御試問被成下度奉願上度旨。

年号——

美濃

耆年 龍溪

越中

上座 僧環

快穩

学林

御役所

一 右選挙ニ付、学試伺書十八通、御用懸り左源太方差出し候ニ付、取調之義御用僧侶善寺江申付ル。則伺書十八通同寺江相渡。

六月廿日

六月廿一日

一 学林選挙ニ付、学試之義、昨年之通伺之人数不殘論題相伺候様、御用掛り長左衛門江申達。

六月廿一日

一 学林学試論題伺、御用掛方差出。右御用僧侶善寺へ勘考申付る。

觀經散善義 善導

著『觀經疏』の

一。七部聖教の

一。

招善寺 『史報』

十四号頭注参照。

長左衛門 『史報』

十四号頭注参照。

【補注】

①御定法

文化四年（一八〇七）四月に再開された学林は、基本的に休講以前の制度が継承されている。懸籍（掛席）の期限を七月十五日とすることも、義教の定めた「宝曆修補の式」にのっとったものである（『嚴護録』、『三百五十年史』史料編三卷、九頁）。『学林万檢』には、飢饉による苦しい状況で上京して懸籍・続席できず、落籍してしまうことを不憫に思つて懸籍の免除が行われたとあ

る(『三百五十年史』史料編一卷、五八六頁)。所化は生活に困窮している者が多く、托鉢等で生活している者もいる苦しい経済状況だった(同三三一―三三二頁)。また懸籍に伴う入賫が定められており(同三〇四―三〇五頁)、上京または在京していても懸籍できない所化がいた。懸籍の免除は、飢饉の影響もあり、生活に困窮して懸籍できない所化への救済措置であった。この免除の期限は、最終的に翌年の三月晦日まで延引されている(『学林万檢』、『三百五十年史』史料編一卷、五八九頁)。

②御先例

將軍代替りの御札に際して、何が行われたかは定かではないが、『学林万檢』天保八年十一月廿九日条には、血誓御用により遠国からも所化が上京している事が記されている(『三百五十年史』史料編一卷、五八九頁)。同条には、その後血誓御用が来春へ延引したとあり、翌年の正月廿二日条で門主が関東へ下向している。

『本願寺年表』によると將軍代替りの御札は三代將軍家光の時から確認でき、五代綱吉の時から代替りに際して、諸国の門末より誓詞が提出されている。吉宗と家重の代には、誓詞の提出が確認できないが、それ以外は十一代家斉の時まで將軍の代替りごとに、誓詞の提出が行われている。少し下るが『学林江被仰出申渡帳』嘉永六年十月廿七日条にも、將軍代替に際して天保期を範として、誓詞の提出が諸国へ命じられている(『三百五十年史』史料編三卷、三四七頁)。

【解説】

本号掲載の『学林諸記』は次の通りである。

四月九日条は、曇龍・行照・令玄・廓超の四名に、本山から所化教諭が仰せ付けられた、というものである。

四月二十二日条は、曇龍・隆恵・廓超・雪峰が、本山の御対面所狭屋において、下間少進と面会し、次のように口達を受けたことが記されている。昨年の凶作のために、今年も上京中の所化は困窮している(補注①参照)。そのため、在京中、さらに今後上京の予定がある所化に、青銅五百銅(錢五百文)を与えることが決定した。また懸席についても、通例では七月十五日であるが、右のような時節を考慮し、また將軍の代替わり(本文頭注参照)でもあるから、今

年のみ、十一月中に遅れて上京するものは懸籍を免除することが定められた(補注②参照)。『学林江被仰出申渡帳』天保八年四月二十日条には、麝香之間において、曇龍に達せられた書面の写しが記されている(『三百五十年史』史料編三、二九一頁)。

五月十日条は、見王儀の日程について、虎之間へ伺が出され、つづく十三日条に、二十日に決定されたことが記されている。なお、『学林万檢』天保八年五月十日条に、「見王之義ハ御札之事故、御用掛リニハかゝわらず虎之間役方之支配なる趣、御用掛方之沙汰ニ候」(『三百五十年史』史料編一、五八六頁)とある。

六月三日条は、来年の安居講本が決定された、というものである。本講は『愚禿抄』、副講は『観經玄義分』である。

六月七日条は、本年副講の行照が、本年講じた『浄土文類聚鈔』の講義録(「聴記」)を御用掛に提出している。「例年之通り」とあることから、毎年講義録を作成し、提出していたようである。この行照の「聴記」は、行照述『文類聚鈔聴記』乾・坤二冊として、龍谷大学大宮図書館に所蔵されている(A真註/54/2)。講義は「肇会四月既望、竟講六月三日」であった。この二冊は、明治二十年(一八八七)六月に、本山より下附されたものであると表紙裏見返しに記載がある。

六月十日条は、本年承襲の成美の帰国願。つづく六月十七日条には、十八名の選挙願が掲載されている。しかし十八名は「余程多人数」であり、加えて「学林役掛り」の者もいることから、今回は格龍・徳垂・玄雄・公龍・全象の六名に学試を許可するという提案がなされ、伺が出された。

六月二十日条では、昨年同様「不残」、論題を伺うように御用掛へ達していることから、前条の提案は却下されたのであろう。翌日には論題伺が御用掛より出されている。

以上が今回の内容である。『学林万檢』五月十日条の事例に見られるように、御用掛の職務内容・職域などの分析は、今後注目していかなければならない課題であらう。

※本文の翻刻・解説は小林健太(本学大学院博士後期課程)、頭注・補注については野口泰宏(本学大学院修士課程)が担当した。

資料室だより

資料保存作業として、以下の作業を継続しておこなっています。

- ・事務文書綴の修復、所蔵資料の調査・目録化
 - ・『立案裁決綴』のマイクロフィルム化と紙焼写真の製本、他所蔵資料の製本
- ※15号より、『龍谷大学史報』はWeb版での発行となっています。

『龍谷大学三百五十年史』通史編 上巻・下巻、史料編 第一巻～第五巻



- 体裁：A5判／布クロス上製本／箱入
- 定価：各 1 冊5,000円（消費税別）
- ご注文は大学史資料室まで、FAXまたは書面にてお願いいたします。
- 送料：有料（送料の実費をご負担いただきます。）

【表紙解説】

本学大宮学舎の東麓の建て替え工事が開始される。現在東麓のある場所には、元々本願寺の坊官下間少進家の邸宅があったことが文化期の境内図から確認できる。それを改修して明治18年(1885)4月より、内学だけでなく普通学も修める普通教校として設置したのが、学校施設としての最初の役割だった。

その後、普通教校は文学寮と名前を変え、松原通大宮西入の地に移ることとなる。以降の校舎の様子は定かではないが、大正3年(1914)4月15日の『教海一瀾』には、武庫仏教中学の閉鎖に際して、「五年生は他に転学し難き事情あるを以て、従来同学附属簡易科の設置されし仏教大学の前元集会議場に移転し引続き授業開始の筈」とあり、武庫仏教中学移転までは集会等を行う場として使用されていたようである。その翌年、学生の増加に対応するため、東寮と名を改めて寄宿舎となっている。大正6年の『建築工事誌』を見ると、教室としての使用も予定されていたようである。上段の写真は昭和3年(1928)の東麓で、大正10年に行われた改修から、多少の修理を経た姿である。また昭和17年3月25日の『龍谷大学新聞』158号には、旧邸宅の頃から存在した林中堂の売却の記事がある。その最後に「其の跡に銃器庫を新設し、現在の東麓銃器庫は教室に栄転することになるといふ」とあり、戦時下において東麓の一部が武器庫として用いられていたことがわかる。

東麓が現在の姿となったのは、昭和45年(1970)からである。昭和37年に男子寮として東麓の南校舎が改築されるなどしたが、教室の不足に対応するため、昭和40年2月大宮学舎の全学寮の閉鎖が決定した。その後本学の総合大学化への問題に伴い文学部を大宮学舎から深草学舎へ移転し、大宮学舎を転用する案が挙がっていたが、昭和43年3月10日の評議会において大宮学舎の存続が決定し、その整備の一環として、4階建て鉄筋コンクリート造りの東麓が、ここに誕生したのである。

建築当時の姿をそのまま残している本館をはじめとする重要文化財群と、時代の要請に応じて変わり続ける東麓は、本学の「進取と伝統」の気風を見事に体現したものであるといえよう。（野口泰宏）

2016年3月25日発行

編集・発行 龍谷大学大宮図書館（大学史資料室）

<http://www.ryukoku.ac.jp/lib/archives/index.html>
〒600-8268 京都市下京区七条通大宮東入大工町125-1
電話：075-343-3311（内線5114） FAX：075-343-3362